あかりも俳句もこころをつなぐ

―私の体験的まちづくり―〈其の二〉

甲斐　朋香（松山大学法学部助教授）

撮影：瀧本則隆（前号・今号とも）

俳句の話に引き続いて、今回は、もはや私のお家芸となってしまった？「まつやま灯明ウォッチング」のお話。私の所属する松山大学にて毎年冬に行う、ロウソクの灯りによるライトアップイベントである。

紙袋とロウソクと重し代わりの砂でつくった手づくり灯明をグラウンドに数千個並べ、地域の子供たちから寄せられた絵を元にデザインした大きな地上絵を描く。地域内外の市民グループにも呼びかけ、温かい飲食物や物品を売る出店や、ライブパフォーマンスも用意する。協力者は、学生中心のスタッフが探し、交渉を行う。企画・運営を行うのは学内外のボランティアである。準備の過程を通じて、社会資源（＝地域のお宝）を発見し、地域社会への関心を高めてもらうこと、人と人とのつながりをつくりだすことを目標に、毎年このイベントを開催して五年が経った。

ゼミ生だけでは人手が到底足りないので、日頃から同僚の研究室などにも出入りし、他学部生でも聴講生でも構わず声をかける。「あっ、人さらいがきたぞー」「今年も『放火』の時期ですねぇ」失笑を買うのも毎度のことである。こうしてかき集めた実行委員会はまさに混成部隊。見どころのある学生ほど忙しく、十月末頃からほぼ毎週開く企画会議も人数が揃わない。チームがまとまりだすのは、例年、本番のわずか一週間前。二日がかりで約三千枚の紙袋を布用の染料で染める作業がカギだ。一見非効率的なプロセスだが、延々続く単純作業の中で会話が始まり、仲間意識が芽生えてくるのである。

本番当日の会場設営ボランティアや見物客がどれだけ集まるかは、毎回賭けだ。

今年度はお天気にも祟られた。十二月二〇日の本番当日は、晴れ、曇、小雨と、気まぐれな空模様に翻弄された挙句、大粒の雹が降りだし、グラウンドから余儀なく撤収。同日は、相乗り企画として、アートNPO「カコア」による「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」も学内にて開催していた。香川県直島の地中美術館館長を

迎え、灯明会場（食堂・ホールなどのある学内施設「カルフール」の二階学生ロビーから地上絵の全体を見渡せる）にてミニ合同交流会を開くつもりで、出店にも準備してもらっていた。学生の発案により実現した、額師「風雅」さんによる「たいせつ人フォトリレー」の記録展示もご覧いただきたかった。「カルフール」入口のピロティに配置する予定だった出店を二階ロビーに移し、そこに灯明を六〇〇個ほど並べることにした。日暮れ前に用意が整い、勉強会から流れてきたお客で会場もそれなりに賑わって、ホッとしかけたところへ、消防車が来た。取材に来られた地元新聞社の記者さんが、何かあってはと心配され、消防署に電話をされたのだ。消防隊員の方に現場のチェックを受け、無事灯がともったときは、緊張が解けて全身から力が脱けそうになった。

結局これではおさまらず、二月四日、「リヴェンジ灯明」に挑戦。当日グラウンドに描くはずだった地上絵の一部をつくった。今までメンバー同士ゆっくり話もできなかったからと、ミニ懇親会も開いた。

前回ご紹介した「いつき組」の方々にも、今年も二度にわたり大変お世話になった。熱々のおでんや芋粥を、ボランティアスタッフや見物客に振舞って下さった方々。西予市宇和から駆けつけてくださった方もいた。いつも精力的に会場設営に励んで下さる俳句食堂「まるやす」チームの方々は、今や主戦力として学生たちに頼りにされている。

毎年絵を寄せて下さるお絵描き教室の先生や子供、その親御さんたち。それらを元に、地上絵のデザインを起こして下さる方々。出店を出して下さる方々。そして私と一緒に走ってくれる学生たち。突き詰めれば、それ自体はただの「火遊び」に過ぎない小さなイベントだが、様々な人の力で続けてこられた。寄せられた想いを大切に、足許を固めながら、そろそろ新たな一歩も踏み出したい。心をつなぐあかりと俳句、さて、次なる展開は―。

「灯明ウォッチング」（計３点）撮影：佐野勝久（アートNPOカコア）、鈴木雅子（愛媛大学学生）

俳句チャンピオン大会

撮影：瀧本則隆